教育実践報告

学生のボランティア体験における変容

── 現代政策学部と経済学部の事例から ──

柳　澤　智　美　　牧　野　郁　子
城西大学　現代政策学部　　城西大学　経済学部

1. 現代政策学部のボランティアとは

1-1　ボランティアによるキャリア形成

1-1-1　必要な能力とはなにか

「ボランティア活動は自分のキャリアを自分の力で切り開く第一歩になる」[1] 3月、リクルートワークス研究所の中村天江主任研究員の言葉である。現代社会は、多くの課題に囲まれており、過去の常識や理論が通用しないことも多い。また、価値観やライフスタイルや働き方に至るまでも多様なニーズや要望に囲まれている。今後、「終身雇用」や「年功序列」といった体制もまた減少し、答の無い課題に取り組むことが必要となっていく。

それは、強力なリーダーシップをとり、中心人物となるための能力を目指す力というよりはむしろ、答えの無い課題に柔軟に対応し協力体制を作りつつ社会の現場で、多様化するニーズを捉え、新しい価値を提供し、自分で考えて行動できる能力である。与えられた仕事をこなすことや、用意された課題をこなすだけでは、その力は身につかない。学生のうちからキャリア形成について考え、社会に貢献できる人材になるべく、答えのない課題にチャレンジする力を養うことが必要である。

1-1-2　現代政策学部のキャリア教育

現代政策学部ではキャリア教育の一環としてインターンシップとボランティアを取り入れている。今回は、ボランティア活動について紹介したい。リクルートワークス研究所によれば、人生100年時代のライフキャリアにおいて、キャリア展望のもっとも高いスコアを出したのは「ボランティア・NPO（0.413）」である[2] とある。

ここから読みとれることは、ある組織の中で優秀であった過去を引きずり、他に違う組織や場所において、いつまでも過去の経験や実績にとらわれてしまい、現状を自他ともに受け入れることが困難となる不安がみてとれる。だが、ボランティアにおいては、自分から動かなければ何もすることも参加することもできない場合が多い。ボランティア先は多様で、メンバーも多様であ

る。その中で人間関係をつくり、目的に向かって皆で努力をする力は現場でなければ学ぶことができない。また、この力は、様々なボランティア先において、協調する力や、物事の解決に向けて実行する能力を身に着けることができる。そのため、現代政策学部キャリア教育委員会ではボランティアをキャリア教育の一環として単位履修のできるキャリア科目として設置した。

1-2　ボランティアと単位認定

1-2-1　単位認定とすること

現在、大学における地域貢献は重要な課題となっている。大学は地域とともにあるべきだという考え方が大多数を占め、地域が抱えている問題解決のために大学の資源を積極的に活用する必要があるという考え方が一般的であろう。城西大学現代政策学部でも、様々な地域貢献に努めている。このような地域に貢献するという姿勢はもちろんといえるが、地域においても大学生へキャリア教育の場を提供するという意識を持って欲しい。例えば、学生がボランティアとして地域のイベントや活動に参加した場合、単なる労働力と考えるのではなく、そこでの経験が学生の研究やキャリア形成につながるように提供してもらいたい。

ボランティアを単位認定とするまでは、学生が参加するボランティアは、学生個人や、ゼミ教員等により、それぞれがバラバラに活動を行っていた。もちろん、それは現在も続いており、学生の学びの場として、それもまた非常に有益といえる。だが、継続的な観点から検討すると、断続的、もしくは単発的になりがちであったことは否めない。そのために継続的な地域との連携にいたらなかった点もある。大学のあり方、学部のあり方、さらにはボランティアのあり方を考え、その結果を学生のキャリアに活かしていくという点からすると、これまでのやり方では学部と地域との関係は希薄であり断片的であったかもしれない。

現在、ボランティアを単位認定化して５年目となった。徐々にボランティア先も広がりつつあり、地域の担当者の方との信頼関係の構築も徐々にではあるができ始めている。

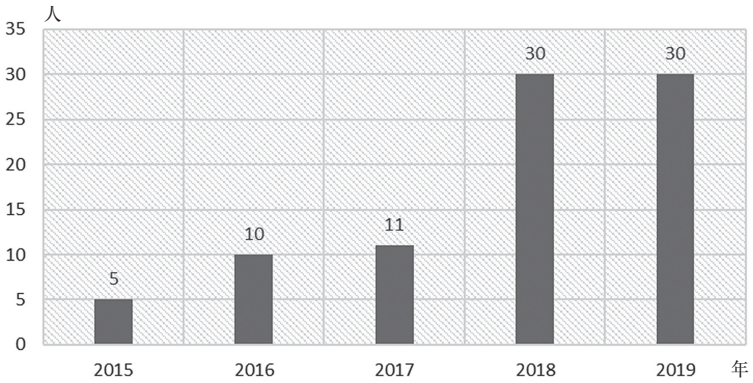

図１　ボランティア履修学生の増加数

（過去データによって作者作成）

1-2-2　ボランティアと制度

全国の大学を見てもボランティアを単位認定としている大学は多い[(3)]。これは、学生が地域で果たす役割が大きいことや、地域と大学が互いに助け合うことによって活性化につながっている実例ともいえる。また、2011年に文部科学省が大学生らの課外活動へ積極的な参加を促すための後押しを始めたことも要因の1つといえるであろう[(4)]。実際、学生のアイデアやサポートがなければ、地域イベントを維持できないという深刻な活動も存在する。これらの現状を目の当たりに学生に見せ、理解してもらうことは、キャリア教育ばかりではなく日本の現状を他人事ではなく近い将来に自分にも起きることと理解する手助けともなる。ボランティアを制度化し単位認定にした意味は、ボランティアのマイナス部分を補うことができるからである。単位認定を行うことでボランティアゆえに自由にやめることができるという点を踏みとどまらせ、困難な状況になったとしても相談し、話し合うことで新しい目標につなげることが可能となる。

単位認定という枠組みはあるがゼミなどの枠を超えて、参加したい学生が継続して地域のボランティア活動に参加していくことが可能となり、さらには教育の場として積極的に地域を活用する機会となる。

そもそも、ボランティアが地域で需要がなければ、この単位認定化の発案はなかった。毎年のインターンシップの受け入れ先における研修内容が、市役所レベルにおいても、お祭りへの参加や、その準備、または清掃活動や、イベント当日の運営や企画などが多くみられ、インターンシップとされているが事実上ボランティアのような研修内容が多く行われていた。ボランティアは地域においても潜在的に需要があると判断したのである。もちろん、ボランティア活動を単位認定にすることは当初は多くの批判もあった。「ボランティアは自発的なものであるから単位認定で縛るべきではない」、または「地域活動とボランティアの差がわからない」、「単位が欲しいから、ボランティアに来ていると言われる」等である。単位認定に対する反対が多く存在し、約1年の準備を要したのも事実であった。だが、当時のキャリア教育委員会委員長の霧島和孝教授による、「今後のアクティアブラーニングに向けて、インターンシップとボランティアをキャリア教育の二輪の軸にしてみよう」という取り組みが実行された。この取り組みと発言によってボランティアの単位認定が可能となったといえる。

1-3　単位認定に係る問題点

1-3-1　ボランティアの定義の必要性

ボランティアを教育の場に活かし、単位認定化した場合の問題点を検討するには、まず「ボランティアとは何か」、その定義を決める必要がある。それは、一般的なことではなく、この活動の理念といえる。ボランティアを単位認定科目としてとらえるならば理念がずれてはならない。可能な限り明確にし、ボランティアの範囲を限定していきつつ、この活動が学生にとって有益であることを目指さなくてはならない。

まず、現代政策学部のボランティアは下記の3点を中心にボランティア先を基本選定している。

1 大学周辺地域が抱える諸問題の解決と、学生が地域の方々と協力し合いながら活動を行える先。
2 地域を教育の場として考えるとともに、ボランティア先もまた学生を育てようと考えてくれている先。
3 ボランティアを制度化することで、地域と継続的に関係を構築していこうという考えを理解してくれる先。

今後は、以上の3点を重視し、学部からおくる学生ボランティアを地域においても十分理解してもらいたいと考えている。また一教員が個人で行うのではなく、キャリア教育委員会としてボランティア活動を単位認定とした点にも特徴がある。このことは、城西大学のある周辺地域を教育の場として考え、継続的な活動を目指すことを可能としたといえる。

これまでの5年間において、「自分でボランティアを探してきてよいか」という学生が例年数名存在し、現在までは了解してきた。自分で探すことができない学生が多い中で、自分で探す力や活動する力を育むという点では素晴らしいことといえる。だが、今後は検討課題する必要がある。この単位認定の目的はボランティアをすることではなく、学生のキャリア教育の場を提供することである。そのためには、自分で探してきた先ではボランティアの活動状況を把握することが困難となる。もちろん自由なボランティアをすることの素晴らしさを否定するものではない。だが、当初の目的を見失ってはならず、単なるボランティア活動とは識別する必要がある。単位認定とするからには、ボランティア先も含めて選定していかなければならないのである。

では、地域のお祭りなどに関わることがどのような意義があるというのか。当日イベントに参加し、言われたことをやった、何も言われなかったのでなんとなくその場に立っていたというだけでは、ボランティア活動によって成長することは難しい。例えば、地域の人手不足を解消するために参加したということだけでなく、お祭り本来の意義を理解し地域住民と多く接触し、普段自分とは関わらない年齢層と交流しつつ、大学とは違う人材交流によって学生自身の視野を広げていく必要がある。また、お祭りに関わった人たちの思いや、現状を理解することも必要であろう。今後は、地域社会の問題点を理解していくことにつながる活動をさらに目指していきたい。

1-3-2 ボランティアを単位認定化するために

まず、現代政策学部のボランティア活動は学生の関心や適性に合わせてボランティア活動を選定し紹介していく方法を選択している。現代政策学部は公務員希望者が多いこともあり、①市と市民が互いに活動しているボランティア先、②警察ボランティア、③学童や子供関係などのボランティア、④国際関係のボランティア等、ある程度決められた活動の中から、学生が選択できるような環境を整えている。その後、どのような先に行きたいか学生と担当者が話し合い決めている。

1-3-3　事前の説明会や事前研修の開催

説明会を開催し、ボランティア活動に関係するキャリア教育の意味などを説明しつつ、事前研修によりビジネスマナー等を学んでもらう。問題発見能力や問題解決能力を身につけることを目指すためには、活動前の意識作りなどもまた非常に重要といえる。また事前研修によって同じようなボランティア先に参加する学生の輪が広がることもある。

1-3-4　カリキュラム上の位置と教員の指導体制

学生のボランティアへの動機づけのための導入や、学生の不安に応えることができるように連絡を常にとれる体制が望ましい。連絡がある学生にだけでなく、連絡が少ない学生はこちらからメールや電話等で連絡し、それにも返答が無い場合などゼミやセミナー担当教員の協力を得つつ現状を把握していく必要がある。常に学生がどのような状態であるかについて、ボランティア担当教員が関心を示す必要があるといえる。

1-3-5　地域の指導体制

学生がボランティア活動に参加することは教育の場が大学から地域の場へ、指導者が教員から地域の人々に一時的にでも移っていることを理解してもらう必要がある。そのためボランティア日誌等による連絡や、教員視察の際のコメントは非常に重要な活動の記録となる。また現代政策学部のボランティア活動はボランティア最終段階において最終発表を行う。その際に、学生の最終発表に参加をしてもらえるように準備をしている。この発表では、学生が実際にどのように感じたか、難しかったか、学んだことなどを発表している。ボランティアの受け入れ側も、どのようにボランティアを受け入れるべきか、体制や内容を検討してもらうことができれば望ましい。例えばインターンシップであれば、受け入れ先で学生を指導する体制やマニュアルが存在し、それを提出してもらえる場合が多い。だが、ボランティアはスケジュール通りにならないことが多い。受け入れ団体によっては、責任者が不在であったり指導マニュアルがなかったり、予定が急に変更になったりする例はよくある。そのため、参加ボランティア学生に、このイベントの目的や主旨はどのようなものであるかを最初に話す時間などをとってもらうことが望ましい。だが、その際にボランティア先の活動の思いを学生が理解するには時間を有することもまた受容してもらいたい。活動に対する強い思いは、時としてボランティアに対する学生の意欲が低下してしまうばかりでなく、教育効果につながらない場合もでてしまう。もちろん指導体制に関しては受け入れ団体に一任するのではなく、互いのボランティア担当者がよく話し合うことも必要となる。互いに理解し合いボランティアを確立していき、キャリア教育の意味を正確に伝える努力をしていかなければならない。この説明を怠るとボランティア学生に、「単位が必要でボランティアに来たの？」という質問をされてしまうことが起こる。これは、キャリア教育としてのボランティアの位置づけを、どのように考えているかという説明が受け入れ団体に行き届いていない所以である。説明不足では、互いに理解し合うことが難しい。今後の大きな課題として改善していかな

ければならない点といえよう。

表1 【ボランティア】2018年度、主な参加ボランティア先 30名（履修登録30名）

市役所関連	坂戸市（市主催イベント） 東松山3 day マーチ 鶴ヶ島市（市主催イベント）
児童関係	NPO法人カローレ（学童保育） 郡山の子どもと遊ぶ会
街づくり、福祉、防災	鶴ヶ島 地域支え合い協議会
警察ボランティア	クリッパーズ ピアーズ
国際関係	さいたま観光国際協会 国際交流センター

1-4 最後に

本学部で、学生のボランティア活動に対して、単位認定を行おうとする場合の留意点について説明しておきたい。

第1に、地域貢献活動を授業として実施する場合、可能な限り、継続できる体制で取り組むべきである。担当者も人間であるため突然なにが起こるかわからない。その時、今まで何をやっていたか誰も知らないでは継続することができない。これが委員会として行う最大の意味ともいえる。ボランティアを単位認定とし地域と連携した場合、担当者不在で今まで何をしていたかわかならいということは避けなくてはならない。「できる教員が担当する」のではなく「すべての教員が担当できるようにする」ことが理想といえよう。

第2に、ボランティアの活動時間である。活動内容にかかわらず現在は40時間としているが、他大学を見ると、単位認定するための活動時間は、80時間など現代政策学部よりも長時間の大学が目立つ。4月から講義がはじまるため、募集活動を行うと実際にボランティア開始は早くても5月後半となり、そこから1月くらいまでの間に40時間のボランティア活動をしなくてはならない。単位認定は1月終わりになるため、ボランティア活動の時期として4月、5月、2月、3月と1年の3分の1はカウントできない期間となる。春は年度の始まりということもあり、多くのボランティアが開始する。また、年度末にも多くの活動がある。この年度開始と年度の終わりに参加できないということは、ボランティアの内容にも制約が出てきてしまうという問題点がある。

第3に、ボランティアの単位認定化には地域の協力がなくてはならない。市や社協や市民団体との連絡は積極的に取らねばならず、団体間と学生の調整やボランティアに対する団体側と学生側の要望などを受け止めていかねばならず、指導体制及び連絡しやすい環境の整備が必要といえる。このような活動の場合中間支援組織としてボランティアセンターの例がよくあげられる。ボランティアセンターを作ることで、学生と地域のマッチングの機能は大きくなり、ボランティア参加が増加する可能性がある。だが、現代政策学部のボランティアの定義は、キャリア教育の一環として活動していることである。目的はボランティアへの参加ではなく、学生へのキャリア教

育の場の提供である。ボランティアセンターの多くは対応件数の増減という量的な側面、つまり求められた人材を調達できたかどうかからしか評価されていないこと、コーディネーターはボランティアが参画できるように、どのようにプログラム立案に関わり、それによりどんな課題が解決したのか等を問う実践の質は、評価の対象にされていない[(5)]という現状がある。これらは、現代政策学部が求めているキャリア教育に結びつくボランティアの形とはいえない。ボランティアセンターの利点も多くあるものの、定義から離れてしまうといえる。今後、ボランティア活動は多様化するため、定義等を見つめなおす時期にきているといえる。

2. 経済学部の地域における体験活動の有効性

2-1　ボランティア体験における学生の変容

2-1-1　活動とその成果

現在、経済学部で担当している「地域ボランティア論」及び「ボランティア活動」について、約 10 年非常勤講師として教鞭をとっている。ここから様々な人々の生活と地域課題にふれ、ボランティア活動につながっていくことに大きな意義と期待をもちながら、続けている。

この 10 年間、一部ではあるが、学生たちと関わることにより、実体験からの学びの大きさを感じていた。城西大学経済学部の学生は、基本的には真面目ではあるが、自ら積極的に何かを求めることは少ないように思う。真面目がゆえに、自分の枠を超えることができない、また、地域や世間にもまれていないことにより、何事にも次の一歩に進むことができない学生がいることも感じている。また、部活や学校活動に入り込めず、なんとなく学生生活が過ぎていくことに焦りを感じる学生が、「ボランティア活動」を受講することにより、活動先でリーダーシップを発揮し、爆発的に成長している学生がいる。これまでも、毎年、数名は、ボランティア活動に初めて参加し、その後、継続することにより、活動先で大きな成果をあげている。それと共に、学生自身もコミュニケーション力や段取り力、後輩をリードする力を徐々につけている。自己肯定感を高めながら、他大学とのネットワークも構築している様子を確認できている。

このようなことからも、実践的なボランティア活動の持つ意味が大きいと感じるとともに、継続しない学生も一定期間体験することによる有用性があるのではないかと考えた。以下で紹介するコミュニティ・サービス・ラーニング調査票により、ボランティア活動を行わない学生（2018 年度）とボランティア体験活動を行った学生（2019 年度）にアンケートを行い、比較をした。

2-2　コミュニティ・サービス・ラーニング調査票によるアンケート調査

2-2-1　調査の方法

「地域ボランティア論」を履修している学生に、オリエンテーション後の 2 回目（4 月の初め）の授業と 15 回目（7 月の最終）の授業時に次ページのアンケート調査を行った。アンケート調査票は、A4 用紙を 4 月片面の設問、7 月は両面の設問を授業時間の 5 分程度で行った。それぞ

れの回答者には、4月のアンケート調査の結果がわからない形になっている。

2018年度の地域ボランティア論では、座学のみの授業となっている。2019年度は、できる限りボランティア活動を実際に行ってもらうことで、評価を行う事とした。そのため、ほとんどの学生が、実際にボランティア活動を行った。日程の都合で、最終のアンケート調査の回答数が少なくなっている。

なお、「地域ボランティア論」は、前期15回2単位の授業であり、受講は1年生から4年生まで可能。その内容は、以下のとおりである。基本的には、2018年度も2019年度も多少のゲストの違いはあるものの、基本的には同じような内容で実施している。また、2018年度も実践的なボランティア活動を奨励し、数名の学生は、ボランティア活動に参加しその活動を報告している。

経済学部「地域ボランティア論」予定表

2018年度

1	4月12日	オリエンテーション　ボランティア・市民活動とは
2	4月19日	ボランティア・市民活動について考えよう！
3	4月26日	視覚障害者の生活、視覚障害者にかかわるボランティア
4	5月10日	視覚障害者にライブ音声ガイド付き映画を！＆ミニガイド体験
5	5月17日	高齢者と子どもと地域福祉
6	5月24日	知的障害疑似体験：コミュニケーションの障害を学ぼう
7	5月31日	傾聴ボランティアの活動から学ぶ（予定）
8	6月7日	認知症理解の寸劇をとおして
9	6月14日	学生ボランティアの活動から学ぶ
10	6月21日	受け入れ側からの提案
11	6月28日	発達障害を考えよう
12	7月5日	精神障害者理解
13	7月12日	振り返り
14	7月19日	まとめ
15	7月26日	試験

2019年度

1	4月11日	オリエンテーション　ボランティア・市民活動とは
2	4月18日	webclass説明　ボランティア・市民活動について考えよう！
3	4月25日	知的障害の理解・コミュニケーションについて学ぶ
4	5月9日	視覚障害者の生活、視覚障害者にかかわるボランティア
5	5月16日	学生等のボランティア活動から学ぶ
6	5月23日	学生等のボランティア活動から学ぶ
7	5月30日	地域に開かれた施設（高齢者）・環境ボランティア里山を地域のコミュニティに

8	6月6日	認知症ってなあに⁇ 高齢化の理解を深めよう
9	6月13日	発達障害についての理解と寄り添うための工夫を考えるプログラム
10	6月20日	傾聴のスキルを取得しよう
11	6月27日	地域に開かれた施設（子ども）
12	7月4日	PTSDについての理解、精神障がいの理解
13	7月11日	防災と地域　【休講】
14	7月18日	まとめ、発表準備
15	7月25日	まとめ、発表

＊この授業は、基本的には参加型（体験、グループワーク）を毎回入れながら、主体性を意図的に育んでいる。

2-2-2　アンケート調査の内容

アンケート調査用紙には、「コミュニティ・サービス・ラーニング」と題している。ボランティア活動の授業ではあるが、実際には、自ら進んで行う「ボランティア活動」ではなく、授業の単位取得ということが大きい。しかしながら、地域の課題解決のための活動であるということから、「コミュニティ・サービス・ラーニング」とした。設問の内容も、自己肯定感の高まりを確認するための内容を心理学の文献を参考にしながら、作成したものを活用している。

地域課題の解決のための活動に学生が参画し、役割を果たす、また、その活動に対して自ら考え実践することを言う。大学等において、活動した活動者の変容について調査するためのアンケートである。

問いは5択になっている・「とてもそう思う　6ポイント」・「そう思う　5ポイント」・「少しそう思う　4ポイント」・「あまりそう思わない　3ポイント」・「そう思わない　2ポイント」・「全くそう思わない　1ポイント」の中から一つを選ぶ。

設問は、以下の①～㉑の21問

① チームワークを発揮するスキルがある
② 新しいことに挑戦する自信がある
③ 分析スキルがある
④ 計画する能力がある
⑤ 問題解決スキルがある
⑥ 自分自身について深く理解している
⑦ 文章表現のスキルがある
⑧ 人間関係を良好な状態に維持するよう心がけている
⑨ 意見の対立による不和に適切に対処できる
⑩ 相手の意見や立場に共感することができる
⑪ 相手の意見や立場を尊重できる

⑫　自分で学んでいく楽しさを知っている
⑬　経験から学ぶ楽しさに気づいている
⑭　自分に対して肯定的である
⑮　自分は色々な良い素質を持っている
⑯　私は地域をよくするための活動に関わっていくつもりである
⑰　地域の一員として、地域を暮しやすいものにしていくことが重要である
⑱　私は、地域の改善に貢献することができると思う
⑲　私が積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができると思う
⑳　地域の一員として、その地域の問題を解決する責任が自分にはあると思う
㉑　地域の一員であることを意識しながら、日常生活を送るつもりである

7月のアンケート調査には、㉒～㉝の12の設問を追加で聞いている。

㉒　全体として、この授業での私の学習は充実していた
㉓　この授業で学んだことのほとんどは、とても興味深いものであった
㉔　今後、この授業で学んだことを大学での学びに活かしていくつもりだ
㉕　私はこの授業を通じて、人間的に成長することができた
㉖　この授業を通して新しい知識を得た
㉗　自分の興味関心が広がった
㉘　現場での活動を通通じて、今まで知らなかったことを知ることができた
㉙　自分が今後探求していきたいテーマを見つけた
㉚　専門分野で深めたいテーマを発見した
㉛　普段の生活の中で学ぼうという姿勢が身についた
㉜　自分の将来に関わる情報を、普段から、積極的に集めるようにしている
㉝　自分が望む人生を送るために、しっかりとした計画を立てている

2-2-3　調査結果

コミュニティ・サービス・ラーニング調査結果

設　問	A/47	B/47	A/47-B/47	A/23	B/23	A/23-B/23	2018-2019
⑲私が積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができると思う	4.11	3.85	0.26	3.91	4.52	−0.61	−0.86
㉑地域の一員であることを意識しながら、日常生活を送るつもりである	4.34	4.04	0.30	4.09	4.57	−0.48	−0.78
⑮自分は色々な良い素質を持っている	3.85	3.60	0.26	3.39	3.70	−0.30	−0.56
⑨意見の対立による不和に適切に対処できる	4.21	4.23	−0.02	3.83	4.35	−0.52	−0.50
⑬経験から学ぶ楽しさに気づいている	4.51	4.28	0.23	4.39	4.65	−0.26	−0.49

⑳地域の一員として、その地域の問題を解決する責任が自分にはあると思う	4.15	3.94	0.21	4.09	4.35	−0.26	−0.47
⑧人間関係を良好な状態に維持するように心がけている	4.83	4.62	0.21	4.83	5.04	−0.22	−0.43
②新しいことに挑戦する自信がある	4.19	4.34	−0.15	4.00	4.57	−0.57	−0.42
⑭自分に対して肯定的である	3.91	3.87	0.04	3.48	3.78	−0.30	−0.35
⑫自分で学んでいく楽しさを知っている	4.28	4.11	0.17	4.26	4.43	−0.17	−0.34
⑪相手の意見や立場を尊重できる	4.70	4.51	0.19	4.65	4.78	−0.13	−0.32
⑥自分自身について深く理解している	4.28	4.26	0.02	3.96	4.22	−0.26	−0.28
⑱私は、地域の改善に貢献することができると思う	3.96	3.89	0.06	4.26	4.48	−0.22	−0.28
⑤問題解決スキルがある	4.09	4.09	0.00	3.78	4.04	−0.26	−0.26
⑩相手の意見や立場に共感することができる	4.70	4.62	0.09	4.61	4.78	−0.17	−0.26
⑯私は地域をよくするための活動に関わっていくつもりである	4.26	4.21	0.04	4.35	4.52	−0.17	−0.22
⑰地域の一員として、地域を暮らしやすいものにしていくことが重要である	4.47	4.34	0.13	4.83	4.91	−0.09	−0.21
③分析スキルがある	3.91	3.94	−0.02	3.78	4.00	−0.22	−0.20
⑦文章表現のスキルがある	3.45	3.70	−0.26	3.00	3.39	−0.39	−0.14
④計画する能力がある	4.06	3.94	0.13	4.00	3.87	0.13	0.00
①チームワークを発揮するスキルがある	4.13	4.45	−0.32	3.87	4.13	−0.26	0.06
㉒全体として、この授業での私の学習は充実していた		4.40	−4.40		5.09	−5.09	−0.68
㉓この授業で学んだことのほとんどは、とても興味深いものであった		4.43	−4.43		5.13	−5.13	−0.70
㉔今後、この授業で学んだことを大学での学びに活かしていくつもりだ		4.60	−4.60		5.13	−5.13	−0.53
㉕私はこの授業を通じて、人間的に成長することができた		4.74	−4.74		5.17	−5.17	−0.43
㉖この授業を通して新しい知識を得た		4.91	−4.91		5.22	−5.22	−0.30
㉗自分の興味関心が広がった		4.64	−4.64		4.78	−4.78	−0.14
㉘現場での活動を通じて、今まで知らなかったことを知ることができた		4.43	−4.43		5.13	−5.13	−0.70
㉙自分が今後探求していきたいテーマを見つけた		3.98	−3.98		4.26	−4.26	−0.28
㉚専門分野で深めたいテーマを発見した		3.94	−3.94		4.00	−4.00	−0.06
㉛普段の生活の中で学ぼうという姿勢が身についた		4.06	−4.06		4.78	−4.78	−0.72
㉜自分の将来に関わる情報を、普段から、積極的に集めるようにしている		4.23	−4.23		4.65	−4.65	−0.42
㉝自分が望む人生を送るために、しっかりとした計画を立てている		4.13	−4.13		4.48	−4.48	−0.35
㉞これからの人生で何をすべきか、具体的な目標を持つようになった		4.13	−4.13		4.43	−4.43	−0.31

4月と7月のアンケート調査の両方を回答した学生の数を有効回答とした。2018年度の有効回答は47、2019年度の有効回答は23となった。回答を全体で集計をして、4月の回答と7月の回答の差をだした。さらに、2018年度と2019年度の差異をそれぞれ総数で割り、一人当たりの値として、2018年度と2019年度の差を算出した。この結果を示した。

2-3 学生のボランティア体験における変容

2-3-1 ボランティア体験活動を通して、学生に付けてもらいたい力

ボランティア活動（地域ボランティア論）を通して、まずは、自らの思いではなくても、地域や個人の持っている問題や課題を知り、関与することにより、社会にある問題に気が付き、自らができることを考え、実際に活動に移すことにより市民性を育むことができると考えている。

元来、学びは自らのために勉学に励むことであるが、ボランティア活動による学習はその知識と技術を社会や自分以外の他者のために活かすことのより、自らの学びと置き換えられる。また、地域は学生を包摂する力があるので、個性的な学生も自己肯定感を高めることができる。このような学びから、学習へのモチベーションやその知識や技術を活かす力をつけることができるようになる。

また、形に見える成果（お金が儲かる等）はとても大切ではあるが、すべてではない。学生が様々な方と関わり合い、その時その時、その場にいる人、自分を大切にすることも、生きていく中ではとても大切なことであると考える。仕事や学業では、目に見える成果が重要であるが、そればかりにとらわれないボランティア活動により、人生を豊かにできる力も長い人生の中では重要であると考えている。

2-3-2 ボランティア体験活動において育まれる力

2018年度と2019年度では、アンケート調査の結果が全体として大きく高くなっている。ほとんどの設問でのポイントが高くなっていることも特筆すべき点である。その中でも特に差が大きなものから、以下の点が考えられる。

① 地域の一員としての意識

「⑲私が積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができると思う」（－0.86）また、「㉑地域の一員であることを意識しながら、日常生活を送るつもりである」（－0.78）である。学生が自ら動くことにより、地域も変わることを実感し、日常生活と地域をいしきできた結果である。この内容が上位になることは、全く予想していなかったが、なかなか地域を意識しない学生が自分のライフステージを様々な方の話から考え、実際に活動することにより、地域における役割を確認したのではないかと考える。

② 自分と向き合い、自己肯定感の高まり

さらに、「⑮自分は色々な良い素質を持っている」（－0.56）、「⑨意見の対立による不和に適切に対処できる」（－0.50）、「⑳地域の一員として、その地域の問題を解決する責任が自分にはあると思う」（－0.49）とポイントが高くなり、半年間で、自分の力や良さに気づく機会となったと考えられる。

③　今後の活動については、消極的

「⑯私は地域をよくするための活動に関わっていくつもりである」（－0.22）、「⑰地域の一員として、地域を暮らしやすいものにしていくことが重要である」（－0.21）の設問については、若干の違いがあるが、大差は見られなかった。いずれの数値も 2019 年度が上回っている。

④　活動のためのスキルについては大差なし

「③分析スキルがある」（－0.20）、「⑦文章表現のスキルがある」（－0.14）「0.0」「④計画する能力がある」（0.00）、「①チームワークを発揮するスキルがある」（0.06）等活動のためのスキルについての差はほとんど見られなかった。今回の活動は、体験的な活動であり、スキルの習得にまではいたらなかったと考えられる。

⑤　授業の満足度の高まり

「㉒全体として、この授業での私の学習は充実していた」（－0.68）、「㉓この授業で学んだことのほとんどは、とても興味深いものであった」（－0.70）、「㉔今後、この授業で学んだことを大学での学びに活かしていくつもりだ」（－0.53）と授業の満足度もボランティア体験活動を行った 2019 年度が大きく上回っている。

2-4　まとめ

この調査結果から、ボランティア体験活動の有用性が以下とおり考えられる。

・地域の一員としての意識の高まり
・自己肯定感の高まり
・授業の満足度の高まり（学習意欲の高まり）

2-5　今後の課題

全体として、満足度が上がっているが、その有効性を高めるためにも継続的な調査と活動ボログラムや受入体制も確認する必要がある。現在、ボランティア体験活動の内容が学生によって違う。1 日 2 時間程度の活動を行った学生から、新年度（4 月）から活動を継続的に行っている学生もいる。また、受入時の価値や意義、活動方法、段取りを教えてくれ、フォローしてくれる担当者がいるかどうかも重要な要素である。

それぞれのアンケート調査票による個別の調査結果を確認しながら、ヒアリング等、このアンケート調査ではでてこない学生の成長や学びについて確認する必要がある。さらには、複数年を継続して、同じアンケート調査を続けながら、体験活動の有用性を確認し、より効果的で学生の成長に結びつく方法を確立したいと考えている。

また、今回のボランティア体験活動は、単発的な活動に終わっている学生が多いが、継続していくことの効果、また、学生自身が主体（中心）となり、本来のボランティア活動（自ら考え行

動する）による成長についても確認する必要があると考えている。さらには、学生を体験活動に送り出す側として、ボランティアセンターの設置が必要であるとも考えられる。ボランティアセンターは地域とのつながりがあり、継続的な活動の紹介と保障、また、学生への働きかけの機能をもつ組織である。

3. ボランティアの今後

文部科学省の文教施策の動向と展開において、生涯学習社会の構築としてボランティアを支援・推進しており全国の大学、短期大学、高等専門学校に対し、学生が被災地域におけるボランティア活動に安心して参加できるように、修学上の配慮などボランティアに参加しやすい条件作り等について協力を要請している[(6)]。このことからもわかるように、今後も大学教育におけるボランティアの活動の場は広がっていくことが予想される。とはいえ、同大学の経済学部と現代政策学部においてでさえ、ボランティアを単位認定とする際の活動の在り方や基本的な活動方針が異なっており、それらを統一することは非常に難しいことが今回の実践報告において判明した。しかし、どちらも学生の成長を目指して活動していることは確かであり、今後とも情報を共有しつつ活動をしていきたいと考えている。互いに良いものを取り入れつつ、ボランティア活動をよりよいものにしていきたい。

だが、ボランティアとして学生を地域社会に送り出すことについては課題も多い。ボランティアを単位認定としてから多くの活動要請が地域社会から寄せられた。前述にもあるように、キャリア教育としての意義を求める現代政策学部としては、慎重にボランティアの内容を見定める必要がある。また保険の整備や、危機管理体制及び、今後も継続するためのバックアップ体制の構築が急務といえる。現在、学生のボランティア活動に資金援助はない。学生は交通費を自分で出してボランティア活動を行っており、今後ますます御父母の理解を求めることや、説明機会を増やすことが必要となるであろう。検討する課題は多く、目に見えて学生に残せるものは何もない。このような学生のボランティア活動ではあるが、だからこそキャリア教育として地域社会とつながり、大学の社会貢献としての存在を示すことや、学生の変容の可視化について今後も検討していかなければならない。そのためにも、今後とも教職員および地域社会における理解が進むよう相互理解に努めていきたいと考える。

《注》

（1）　日本経済新聞社　春秋 2019/4/13 付

（2）　リクルートワークス研究所「人生 100 年時代のライフキャリア　どう変わる？21 世紀のライフキャリア・デザイン」2018

（3）　明治大学政治経済学部では、学部が認定する機関（公共部門、民間部門、NPO など）でのボランティア活動に参加（https://www.meiji.ac.jp/seikei/project/volunteer/volunteer.html　2019 年 8 月）現代政策学部よりも多い 80 時間であり、政治経済学部インターンシップ委員会が担当している。

早稲田大学文化構想学部では45時間以上のボランティアとあり、（https://www.waseda.jp/flas/cms/students/registration/#anc_43　2019年8月）活動報告書や翌年に単位認定となっている。

（4）　日本経済新聞（ボランティアで単位認定　文科省、全大学に要請　被災地支援に後押し　2011/4/5付）

（5）　http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/hpad199501_2_100.html

（6）　平野幸子、河島京美『ボランティアセンターにおけるボランティアコーディネーションの実践上の課題 ── 個人のボランティア募集希望者への対応に関する一考察 ── 参考文献』研究所年報（36）、43-56、明治学院大学社会学部付属研究所、2006

参考文献

1. 村上徹也 「サービスラーニング要件10　今なぜサービスラーニングなのか」ふくしと教育通巻27号、2019
2. 川田虎男 『大学教育におけるサービスラーニング導入の可能性について』、聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol. 23 (No. 3), 17-25, 2013
3. 木村充、河井亨『サービスラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究』日本教育工学会論文誌、2012
4. 手塚眞、福士正博、安川隆司著 『《研究ノート》学生の地域貢献 ── 単位認定化を中心に ──』東京経大学会誌 Vol. 265, 155-171, 2010
5. 鳴瀬剛大、市居利絵、築地佑人 『大学におけるボランティアセンターのあり方～先駆的大学調査と本学ボランティア支援の課題から～』桃山学院大学総合研究所紀要 Vol. 42 (No. 2), 73-104, 2016
6. 堀洋道　監修／山本眞理子編 「心理測定尺度集Ⅰ」サイエンス社、2001